

〔第4巻〕久保文明・有賀夏紀編著『個人と国家のあいだ〈家族・団体・運動〉』

(2007年6月)

〔第6巻〕荒このみ・生井英考編著『文化の受容と変貌』

(2007年11月)

佐藤宏子

はじめに

むかし話から始めることをお許しいただきたい。

1931年、のちに「アメリカ研究」の土台になったとされる「アメリカの思想と文明」という講座が、ラルフ・ゲイブリエル (Ralph Gabriel) とスタンリー・ウィリアムズ (Stanley Williams) の共同作業でイエール大学に設けられてから四分の三世紀が過ぎた。その当時のことを、ゲイブリエルは、1953年、アメリカ歴史学会の講演で次のように回想している。「1930年代の初めごろ、学科間の壁に対するある種の抵抗が現れてきた。ニューヘヴンの多くの人たちは、何が壁の中に取り込まれ、何が外に残されたかという、ロバート・フロストが詩の中で発した問いを抱くようになっていた。…この問いは、従来の学問の価値を疑っているのではなく、学科間の壁を越えての協力が、探ってみる価値のある、より多くの可能性を孕んでいると思えたからである。」このような「越境」から始まった学際的な試みは、1933年、「History, the Arts and Letters」という奇妙な名称の学科の設立に至る。しかし、1930年代のアメリカ社会の経済的状況、1940年代前半の第二次世界大戦は、その試みの発展を阻むことになった。結局、アメリカ研究科がイエール大学に設立されたのは1948年、文学、歴史、美術史、経済学、社会学、政治学、宗教学という分野の協力によってであり、これがアメリカの大学において「アメリカ研究」が学科として成立した最初のものとしてされている。このような寄せ集めの学科であるアメリカ研究科に、学科としての統一があるのかという保守的な人たちの疑問に対して、ゲイブリエルはこう答えたと言われている。「一つの文化には、その多様性にもかかわらず統一があるのだ。文化に特異性を与えている一つの精神があるのだから。」

ゲイブリエルがアメリカ歴史学会でアメリカ研究創設のころを回想してから15年後、彼の後を継いでイエール大学でアメリカ研究科の発展に尽したノーマン・ホームズ・ピアソン (Norman Holmes Pearson) は、1968年の米国アメリカ学会の会長講演でこの問題を取り上げてこう語っている。「我々の多くは一つの型を求めている。外部の人たちは『アメリカ研究』を一つの『学科』(discipline)として定義しろと言う。しかし、方法や結論の同一性というものが『アメリカ研究』の本質の欠くべからざる部分なのだろうか。私自身の答えは否である。『アメリカ研究』の特質は、何事をも受け入れる広さと、開放性にあると私は考えている。この特質なしには、開け広げで柔軟で実際的な(時には、みっともないほど実際的な)アメリカ文化を捉えることはできない。」おそらく、1950年に「東京大学—スタンフォード大学アメリカ研究セミナー」が開催された当時、「アメリカ研究」は上記のように考えられていたのではないだろうか。

それから半世紀以上の時が経過し、日本におけるアメリカ研究はどのように変容し、体系化され、学際的な学科として発展してきたのであろうか。今回、アメリカ学会創立40周年の記念事業の一つとして2006年から2007年にかけて『シリーズ・アメリカ研究の越境』6巻が刊行された。「刊行のことば」によればその意図は、現在のアメリカの状況を「歴史、政治、経済、思想、文学、環境、ジェンダーなどさまざまな学問分野から、そしてそれらを横断する学際的な視角から解明しよう」とする試みであるとのことである。日本を代表する中堅、若手の研究者を総動員して編纂された感のあるこのシリーズは、日本におけるアメリカ研究の「現在」を知るための絶好のものであろう。私に割り当てられたのは、第4巻『個人と国家のあいだ〈家族・団体・運動〉』（久保文明・有賀夏紀編著）と第6巻『文化の受容と変貌』（荒このみ・生井英考編著）であるが、第6巻の末尾にはこのシリーズの編集に携わった12名（1巻を2名で担当）のアメリカ学会で中心的な活躍をしている研究者による密度の濃い座談会が収録されているので、いわば3冊を評するという大変荷の重い仕事になった。

その上、同じシリーズとはいえ、第4巻と第6巻とは性質の異なるものであるので、関連付けて評することは殆ど不可能と思われる。従って、この書評は3部構成とし、第4巻、第6巻、座談会『『アメリカ研究の越境』とは何か』にそれぞれを割り当てたいと考える。第4巻と第6巻の性質が全く異なるものと述べたが、それは一言でいえば第4巻が伝統的な「アメリカ研究」であるのに対し、第6巻は日本でしかできない「アメリカ研究」であり、新しい「アメリカ研究」の可能性を示すものと考えられることができるからである。

1. 第4巻『個人と国家のあいだ〈家族・団体・運動〉』

20世紀前半を代表する作家の一人、ウィラ・キャザーの短編「最良の歳月」（1932）に登場するネブラスカ州の貧しく子沢山の農婦が、「東方の星」結社をはじめとする5つもの団体に所属して週末を忙しく過ごす話を学生時代に読み、奇異な印象を受けたことを記憶している。個人が繋がって組織を作り帰属感を持つことが、アメリカ社会に生きる人々にとって必要なことであり、アメリカ社会の一つの特性であることを理解したのはその後アメリカでの学生生活でフラタニティ、ソロリティの存在を知り、それが日本の大学のクラブ活動とは全く異質のものであることに気づくようになってのことであった。本書の帯には「相互に繋がり合ってつくる／組織からアメリカ社会を見る」というキャッチフレーズが掲げられ、「国と個人の間介在する家族・組織・団体・コミュニティ・運動」を通して「アメリカらしさとアメリカの変化と現状」を解明しようという意図が示されている。

構成は、第Ⅰ部「アメリカ社会をつくる」、第Ⅱ部「アメリカ人をつくる」、第Ⅲ部「アメリカ社会を変える」の3部に分けられていて、それを編者執筆の序章「組織からみるアメリカ」（有賀夏紀）と終章「個人と国家のあいだからアメリカを考える」（久保文明）が挿む形をとっている。序章では、「アメリカ例外主義」の根拠となっている個人主義について、肯定的な見解と否定的なものが紹介される。前者としてフレデリック・ジャクソン・ターナーやシーモア・リップセットが、後者にはロバート・ベラー、ロバート・パットナムなどの名前が挙げられている。個人主義を民主主義の根底にあるものと考えた立場と、個人主義が強くなることは、民主主義社会の崩壊に繋がるというパットナムの「ソーシャルキャピタル衰退論」に代表される考えが示されている。アメリカの個人主義にいち

早く注目したのは、フランスの思想家アレクシス・ド・トックヴィルであり、彼が個人主義がやがて民主主義を崩壊させる危険があることを指摘しながら、同時にアメリカにおける「アソシエーション」が「民主主義を保証する」ものであるとしたことを紹介する。

第Ⅰ部は7つの論文で構成されている。「異性愛という制度」(松原宏之)、「白人近隣組織の活動と新しい保守主義の形成」(宮田伊知郎)、「コーポレート・アメリカ」(谷口明丈)、「二大政党」(岡山裕)、「ジャーナリズム批判と自己統治」(石澤靖治)、「アメリカ社会と内部告発」(寺尾美子)、「バスケットボールと『アメリカの夢』」(川島浩平)である。2008年の大統領選挙、格差社会の広がり、官庁や企業内の内部告発、NBA, MLB, NBLなどのプロスポーツといった、いずれも現在のアメリカの状況(同時に日本の状況)に深く関わる問題を取り上げ、説得力のある力作が並んでいる。評者の関心がある結婚制度については、松原論文が同性婚抑圧と1950年代から冷戦期において、異性婚に基づく核家族がアメリカの政治・社会を支える力であったことが指摘されているが、この背後にキリスト教会の存在があり、これはアメリカに限らない問題ではないかという点は明確にしておくべきではなかっただろうか。その点からいえば、宮田論文が人種間の摩擦の問題で触れ、第Ⅱ部の平井論文で宗教右派が取り上げられてはいるものの、アメリカで最強、最大の組織であるキリスト教会、ユダヤ教などの宗教組織がこの巻で取り上げられていない点が気になった。

第Ⅱ部は、「新しい家族像・新しい母親像を求めて」(杉山直子)、「ホームスクール運動の諸相」(宮井勢都子)、「心の習慣を求めて」(平井康大)の3論文で構成され、家族、教育、信仰という人間形成の3本柱が取り上げられる。杉山論文では、いわゆるマイノリティといわれる、アフリカ系、中国系、先住民の女性作家の作品を通して、家族、母性の既成概念の崩壊とその再構築の問題が提示される。また、宮井論文では公教育を拒否して自宅や小さなグループで教育を行うホームスクールが人種の境界を越えて広がっている現状が、それが抱える問題とともに示されて興味深い。また、平井論文では政治との関連で日本でも関心が高い宗教右派の問題がプロミス・キーパーズを例に分析されている。それぞれの論文は優れたものと考えるが、主流ではないものを通して社会全体の問題を提示するには、その意義を読者に納得させるだけの工夫が必要なのではないだろうか。単なる特異な現象の解説に終る危険は避けなくてはならない。

第Ⅲ部は「アメリカ・フェミニズムの今」(栗原涼子)と「公民権運動とその波紋」(大森一輝)の2論文が20世紀後半から現在に至るまでのアメリカを動かしてきた運動を取り上げている。この二つの運動はほぼ時期を同じくしてアメリカ社会を揺るがし、変化させてきたものであり、それを取り上げたこの2論文は一对として意義のあるものと考えるが、大森論文が運動の思想的な解説とともに具体的な活動を示すことで、迫力のあるものであるのに対し、栗原論文は活字を通して示されたフェミニストたちの思想を解説するに止まってしまったことが惜まれる。

以上、第4巻について思いつくままに読後感を述べてきたが、各章のテーマの選択には、日本からアメリカに向けられた視点を示すインデックスが表れているように思われる。この本に統一感を与え、欠落している部分を補っているのが、「終章」である。アメリカの地域社会にはヨーロッパや日本のような「伝統的共同体」の色彩が薄いことを指摘し、それを補ってきたのが「中間的団体」であることを再確認し、政党、教会、企業、専

門家（医師、弁護士など）団体、利益団体・政治運動の意義を認め、このような組織と個人の関係の重要性に注目している。アメリカの例外性、特殊性を否定的にみる見解が少なくない現在であるが、「個人と国家のあいだからアメリカをみることには、少なからぬ意義がある。そこには、比較的にみたアメリカの特徴が表れている」という結語には、編者の立つ位置が明確に示されているといえよう。

2. 第6巻『文化の受容と変貌』

第4巻がオーソドックスな「アメリカ研究」の成果といえることができるとすれば、第6巻は、新しい「アメリカ研究」の可能性を示すものといえることができよう。俗ないかたをすれば、「なんでもあり」であり、内容にも凸凹がないわけではないし、評価も定めにくいだが、玩具箱をひっくり返したような、興奮と期待を感じさせるものでもある。構成は第Ⅰ部「思想としてのアメリカ」、第Ⅱ部「アメリカ受容の軌跡」、第Ⅲ部「表象と変容のアメリカ」、第Ⅳ部「多国間関係時代の日本と世界」の4部に分けられている。それを、2人の編者による序章「日本のプリズムを通した〈アメリカ〉」（荒このみ）と終章「文化変容の変容」（生井英考）が挿む形をとっている。

序章では、本書の意図が「アメリカ研究が日本人研究者による一方通行的な分析・紹介になってしまうことをおそれ、受容の問題だけではなく、両者の関係性の問題に焦点」をあてると明確に表明されている。日米の関係は百数十年前に遡るものだが、やはり敗戦と占領に始まる「アメリカの強烈な刻印」の検討が本書の中核をなすものである。アメリカは括弧つきで〈アメリカ〉と表記されるが、それは、戦後60年のあいだのアメリカ体験を通して日本人が作り上げてきたアメリカ像があるという認識によるものである。

第Ⅰ部は「鉄条網のなかの民主主義講座」（梅森直之）、「森有礼・新井奥遼のアメリカ体験と思想実践」（阿部珠理）、「米国教育使節団報告書のコミュニケーション論的解説」（倉石一郎）の3つの論文で構成される。梅森論文は第二次世界大戦中、強制収容所のなかでアメリカの地理、歴史を講義した藤井寮一という人物の足跡をたどり、彼が収容所で行った講座の詳細を伝える興味深いものである。これまで一般には知られることのなかった藤井の業績と、マルクス主義の洗礼を受けたキリスト者藤井がアメリカ民主主義に賭けた思い、それに接した収容所の日系人たちの心の揺れに、第二次世界大戦下の日米関係の一端が示される。阿部論文では時代がさらに明治期に遡る。イギリス生まれでアメリカに移住し、キリスト教心霊主義を掲げて生活共同体「新生同胞社」を設立したトマス・レイク・ハリスの影響を受けた2人の日本人を取り上げている。森有礼と新井奥遼である。この組織は、19世紀半ばにアメリカで数多く設立されたユートピア的共同体の一つであるが、初代文部大臣として「日本における近代国民教育のグランド・デザインを描いた」森が共同体での勤労と「新生」の実践経験から何を学び、何を日本の教育に取り入れたのか。その受容と変容に興味をそそられた。また、森の紹介でこの共同体で28年の歳月をハリスの「完全な服従者」として過ごした新井奥遼が、帰国後「講和舎」を設立し、田中正造をはじめ多くの明治期の知識人の共感を得たことは、新井がハリスのもとで身につけたキリスト教的人道主義を受容する状況が日本に存在していたことを示している。倉石論文については、この課題に「コミュニケーション論」を用いることが適切だったか、という疑問を呈するに止めたい。「アメリカ研究」として1946年の「米国教育使節団報告書」

を取り上げるなら、当然その報告・勧告の内容分析がなされるべきと考えるからである。

第Ⅱ部は「アメリカのアカデミズムと日本のアメリカ文学研究」(村山淳彦)、「異なる『近代』」(小林剛)、「スウィング・ニッポン」(細川周平)という3つの論文を通して歴史的パースペクティブでの文学、美術、音楽の受容を扱っている。村山論文で取り上げている日本の学界でのアメリカ文学研究は、西川正身の指導を受けた第一世代である評者の学生時代では、英文学へのコンプレックスを負わされた屈折したものであり、これもアメリカ文学受容の諸相の一つと思われるが、新英米文学社のこと、高垣松雄の功績など記録に留められたことを評価したい。ただ、ここに描かれている研究者の系譜は東京大学英文科を中心としたものであり、関西地域、私立大学関係などでの研究活動について、今のうちに目配りをしておく必要があるのではないかと感じた。小林論文は日本と出会ったアメリカ人フェノロサの日本受容の過程と限界を取り上げ、そこに「アメリカ」を読みとるという逆転の発想が興味を引く。この主題はアメリカでも Christopher Benfey の *The Great Wave* (2002) などで詳細に検討されているので、日米の研究者の視点のずれなどへの言及があれば、一層の深まりが可能ではないだろうか。昭和の初期から第二次世界大戦までの時期、日本が熱心にアメリカ文化を吸収し、音楽、ダンス、電化製品、ファッションに影響を受けていたということは、あまり注目されていない。その時期の黒人スウィングバンドの日本での受容を扱った細川論文は画期的なものといえる。

第Ⅲ部は「アメリカを抱きしめて」(吉原真里)、「メイキング・オブ・村上春樹」(都甲幸治)、「マテリアル・ガールの残像」(當間麗)の3論文。吉原論文は、著者自身のアメリカ体験を土台に、桐島洋子『淋しいアメリカ人』と吉田ルイ子の『ハーレムの熱い日々』に示されるアメリカ体験が分析されている。日本女性による「アメリカ体験」は個人的体験にすぎないとも思えるが、それが「文化接触・ジェンダー・階層・人種についての社会史」になりうるという指摘は鋭い。文化が出会い、融合する手段の一つに「翻訳」がある。世界で「最もアクセスしやすい」日本人作家といわれる村上春樹は、同時に優れたアメリカ文学の翻訳者でもあるのだが、グローバルに受容される作家への彼の変貌を「翻訳」をキーワードに解明しようという試みが都甲論文である。明快でスマート、洗練された議論の展開は魅力的だ。當間論文は「セックスシンボル」として自らを商品化したマドンナの日米における受容の違いを比較検討している。倅田来未との比較もまじえ、セクシュアリティを「倫理的価値観」として捉えるアメリカと、「個性という美学」で受け取る日本の対比を通して双方の文化の質の違いも示されている。

第Ⅳ部を構成する4つの論文のうち3つは日本からアメリカ(世界)にむけての発信を扱っている。「日本型自動車生産システム」(野林健)、「旅先より世界を眺めて」(スーザン・J・ネイピア)、「日本的なインターネット文化の誕生をめぐって」(歌田明弘)である。残る一つの論文「安全保障と高度成長をめぐる韓国・アメリカ・日本の関係」(朴根好)は、今後の「アメリカ研究」の重要な課題、二国間の枠を「越境」しての影響関係の検討の一例を示している。このような「三つ巴」や「四つ巴」の交流と影響の研究は今後さらなる発展が期待される。いずれの論文も、それぞれの分野で優れた業績を持っている研究者のものだけに、説得力があり部外者の評者にはコメントする資格はないのだが、野林論文のアメリカで生まれたフォーディズムがトヨタ方式に変容し、それがアメリカに「輸入」されていく過程、文化の違いから生ずる摩擦をも乗り越える「効率」というファクターの大き

さを改めて実感した。同様に、アメリカから入ってきたインターネットの日本における受容と変容を取り上げた歌田論文は、サイバースペースを通して形成される「オタク」文化をアメリカ文化の「国産化」の一例と捉え、日本文化の特質を、アメリカを鏡にあぶりだしている。「アニメ」は今や日本最大の輸出品であり、在外公館でも国策的なイベントが催されるほどだ。ネイピア論文は、アニメを「国籍や民族を越えたトランスナショナルな文化の流れの具体例」と捉え、何故アニメがグローバルに受け入れられているのかを分析する。豊富な統計的事実やインタビューをもとに、アイデンティティや帰属意識の提供、擬似的であろうともアニメが提供する「リアリティ」が人々を惹きつけることを指摘している。

以上のような多岐にわたる分野と視点に統合を与えているのが、終章「文化変容の変容」である。文化受容の現場では、出会った文化双方がともに変化するというダイナミズムを提示することが本書の意図であることが確認されている。そこに衝突や抵抗があろうとも、それ自体が「創造性」を持つことを生井論文は強調し、本書の意義を積極的に評価している。

3. 座談会『『アメリカ研究の越境』とは何か』

紙数が尽きてしまったので、「まとめ」として第6巻巻末の座談会に簡単に触れておきたい。これは、シリーズの編集に関わった12名の研究者によるものであり、現在、日本における「アメリカ研究」の現状に関心を持つ人々にとって多くの情報と示唆を与えるものであると思うので、一読を薦めたい。実は、この座談会を読んだとき、このシリーズには書評は不要だというのが感想であった。編者たちは、自分が編集した巻の内容について、また、他の巻の論文について、批評的検討を行っているからである。南雲堂や研究社からアメリカ研究の講座が出版されてから、30数年の時間が経っている。アメリカ研究者の数は数倍になり、情報・資料の入手の容易さ、留学や学会出席などの海外との交流の機会、研究者自身の語学を含む能力の高さは比較にもならない。アメリカで流行していることはリアルタイムで日本に入ってくる。若い研究者たちは二国間の境界を軽やかに越境し、アメリカで流行している理論や文化的インデックスを使いこなす。そのような恵まれた環境で研究生活を送る現在の研究者には、おそらく30数年前の先達たちの業績はとるに足りないものと思われるかもしれない。一例をあげれば、かつてマーク・トゥエインの代表作といえば『ハックルベリ・フィンの冒険』であったが、現在の研究者の関心はより後期の作品であるという指摘がなされている。一世代前の研究者の視野の狭さを示す発言ともとれるが、果たしてそうだろうか。

冒頭に、「アメリカ研究」創設のころのことを書いたが、「アメリカ研究」は、半世紀にわたるその複雑化、洗練にもかかわらず、根底において、生きた時代と文化を背負った研究者がアメリカと向き合うという「泥臭さ」を持ち続けているように思われ、それが「アメリカ研究」の魅力と評者は考えている。このシリーズは、グローバル化がすすみ、多国間の文化の衝突、融合、変容が絶え間なく繰り返されている21世紀の初めという時代の中で、それを反映して作られたものであり、その意味で一つの集大成的な叢書が生まれたことは、慶賀すべき出来事である。時代の中の「日本・アメリカ・世界」を写す鏡といえるだろう。